

兵庫県立人と自然の博物館開館 20 周年記念シンポジウム
「新たな博物館の役割と地域貢献〜次世代の博物館活動を描く〜」
パネルディスカッションの記録

コーディネーター：岩槻邦男（兵庫県立人と自然の博物館 館長）

パネリスト：近藤信司（国立科学博物館 館長）

安部義孝（ふくしま海洋科学館 館長）

林 良博（山階鳥類研究所／兵庫県森林動物研究センター 所長）

岩槻：それでは、今日のイベントの最後になります、パネルディスカッションに入りたいと思います。時間が非常に限られていますので、パネリストの方々、発言は簡潔にお願いいたします。20 年を振り返って、いま中瀬副館長がご紹介いたしました市民向けにつくりました本の表題は「みんなで楽しむ新しい博物館のこころみ」としました。ひとはくの活動は先ほどからも紹介されていますように、兵庫県立の博物館ではありますけれども同時に日本の博物館、日本では博物館に何が求められているか、という課題を常に意識しながら、そのなかで地域での活動をやってきていると自分たちとしては思っているわけです。いまの中瀬副館長のプレゼンテーションとそれから本当はこの本をお読み頂ければよかったですけれども、目次に目を通して頂いたくらいの範囲で、自然史系、自然科学系の博物館は、どう対応すべきかをそれぞれご自身の関わりで、最初にご紹介頂き、それに伴ってひとはくの活動について、できれば批判的なご発言を最初のラウンドではご紹介頂きたいんですけれども。便宜的に、こちらに座っていらっしゃる近藤館長から。近藤館長の科博は、日本では国立の自然科学系の博物館は科博しかないわけです、そういうところでのご経験を踏まえて、ご発言を頂ければありがたいです。よろしくお願ひいたします。

近藤：まず、博物館の役割ですが、博物館は資料を収集・保管・継承し、その資料に基づく実証的な研究を行い、その成果を展示や学習支援活動に活かすという機能を持っているわけであります。この機能は今後も引き続き維持されていくべきでしょうし、また、さらにそれを発信していかなければいけないと思います。そのうえで、博物館のあたらしい文化的な価値とか役割には何があるんだろうかということを考えてみるのですけれども、特に先ほど来お話がありました、東日本大震災後、つながりとか絆という言葉が盛んに言われております。様々な社会的課題に対して、人と人、人と社会のつながりのなかで協働して解決していくということが、従来にも増して求められています。言葉を変えますと様々な社会的課題に対して、一人ひとりが自立して判断し、地域社会の中で他人と協働・参画して新しい工夫をし、解決していくということが必要であります。そういう意味でいきますと、博物館は個人と社会、あるいは世代間をつなぐ、いわば知のプラットフォームとしての新たな機能を創出していくということが重要になってきています。まさに知を伝える

だけではなくて、知の交流をはかる。これはひとほくの「演示」という手法や考えと相通じるものがあるのだらうと思っております。そういう意味で、むしろひとほくは先駆的な役割をはたして、改めて敬意を表するわけでありませうけれども、そういう博物館の機能、役割、こういったものを大切にしていきたいと思っております。また、博物館は、ある意味お客さんあってのものであり、特に私どもは独立行政法人でありますから、お客様に来て頂かないといけないんですけれども、利用者の個人的な要望とか、ニーズと言うのは大変様々なものがあるかと思えます。これに一つ一つ応えるということはもちろん大切なことなんですけれども、様々な社会的課題に直面しているという状況の中で、博物館は社会とともにあるんだ、社会とともにある博物館として、社会との関わりですとか、社会との関係性と言うものを従来以上に重視していくことが大事だと考えています。こう言う視点に立って、積極的に社会に働きかけ、地域の課題の解決に向けて貢献していくことが博物館が地域の文化や教育、あるいは生涯学習の拠点になっていくことにつながるものと思えます。そういうことが可能になっていくんじゃないだらうかと。ひとほくのこの20年のあゆみを振り返りますと大変先駆的な博物館としての活動をされております。ぜひ、この20周年を機に一度成果・課題を検証して頂いて、それを情報発信して頂きたい。私ども科博は、全国の科学系の博物館の協議会の理事長館をさせて頂いておりますので、何かまたご協力できることがあれば、させて頂きたいと思っております。

岩槻：どうもありがとうございます。安部館長は福島と言うことで、震災・津波で大きな被害を受けられた地域から、今日わざわざおいで頂いたわけなんですけれども、ということも踏まえて、ひとほくに何かコメント頂けることがあればと思います。よろしく願いいたします。

安部：ご紹介いただきましたアクアマリンふくしまの安部と申します。まずはひとほくの20周年おめでとうございます。昨年のあの日に地震や津波に襲われて、ちょうど水族館は小名浜埠頭の2号埠頭にございまして、ウォーターフロントで水に突き出した施設ですので、地震はともかく津波に囲まれまして、職員が孤立したりしました。幸いにその時にいたお客様はみな安全に避難されました。まず、皆様方のご心配とご支援に感謝いたしたいと思えます。水族館は生きた博物館ですので、生き物のレスキューと言うのは緊急を要します。秋篠宮さまが総裁をなさっておられる日本動物園水族館協会の強力なネットワークが動き出しまして、トドとかセイウチとかアザラシという大物の海獣類、なにしろ停電になりまして電気がないわけで、餌がストックできないということで、鴨川シーワールドを中心に全国の水族館に大形動物が避難していきました。相当再開するのに苦労したんですが、幸い4ヶ月後にちょうど11周年の7月15日にお客様を迎えることができて、周辺一帯、災害の復旧もままならないときでしたので、子どもたちをはじめ、地域の人たちには大変喜んでいただけたと思っております。水族館のような非常に光熱水費の高い、電気

がないと手も足も出ないというような施設のあり方について大変反省させられました。水族館は博物館の一つであります。博物学と言うのは大航海時代を経て博物学が隆盛をみて、そのシンボルはダーウィンの種の起源です。災害を受けるとその原点、シンク・グローバリーとも言い換えられますが、原点から考え直す機会を私に与えてくれたと思っています。要するに、自然の突然変異で、いまの多様な生物相がある。それは進化と言いますけれども、大半絶滅を伴っているんですね。で、その生態地位の空白ができれば、そこに新しい生物が展開していくということを繰り返して、今日があるわけです。ノーベル賞の山中伸弥さんは一つの細胞からつくりだすということで、38億年の地球の生命まで思いを馳せることができたと思っております、その辺で、この災害を転じてプラスにしようということを考えております。

岩槻：どうもありがとうございます。林先生は今日の肩書は兵庫県にいらっしゃるもんですから、兵庫県森林動物センター所長ですけれども、山科鳥類研究所の所長もやっておられますし、何よりも東京大学総合博物館の館長も経験しておられますし、そういう博物館関係の経歴も踏まえて、ご発言を頂けたらと思います。よろしく願いいたします。

林：この式典が始まる前に、秋篠宮殿下、井戸知事、そして岩槻館長をはじめ皆さまとお話させていただく時間がありました。そこで話題になりましたのは、博物館は標本が大切ということでした。標本がない博物館というのはあり得ない。標本は研究活動をはじめ、いろんな活動をしていけばどんどんたまっていくものですが、残念ながら集めた標本を保管する場所がないという問題があります。これは日本の博物館が抱えている究極の悩みです。近藤館長の科学博物館はずいぶん立派な収蔵庫を筑波につくられましたが、おそらく10年もたてば満杯になるのではないかと思います。日本は100年先を見越した収蔵庫を考えるという文化的風土がない国なんですね。私が館長をしていました東京大学の総合博物館は、科学博物館とほぼ同程度の400万点から600万点の標本を持っていますが、収蔵庫が手当てされなくて困っています。ところで、安部館長が言われたように、災害という非常に不幸なことが起きた場合、これはもう本当に悲しいことではありますが、それを契機に頑張ろうとか、何かをしようという前向きの発想が生まれつつありますが、標本を増やそうにも場所がない、展示場もないという現状を克服しなければなりません。秋篠宮殿下が仰ったことですが、たとえ100年に一度しか利用されない標本であっても、国民の皆さんに保管しておくことの重要性を理解して頂くことが大切です。私が館長をしていました東大の博物館は、キャンパスの片隅に位置しておりますので、道に迷って冬は遭難するんじゃないかと冗談を言っていたような立地条件で、しかも大学は敷居が高いと感じておられる人が少なくないので、それだったら来て頂くだけでなく、逆に標本を大学の外に飛び出させよう。これを「遊動博物館」と名付けています。ひと博でも移動博物館として標本を外に飛び出させておられますし、さらに豊富な人材をどんどん外に出してらっ

しゃいますよね。標本を出す、人も出る。いつまでも自分のところで待っているだけじゃないという、そういう活動をひと博は先駆的にやってこられました。私たち東大博物館はやむにやまれぬ事情があって遊動博物館を考えたのですが、いずれにしても、それは災いを転じて福となすという、今回の震災で本当に多くの方たちが頑張っておられる考え方に近いのではないかと思います。兵庫県は大きな県で、瀬戸内海から日本海まで、地域によってはかなり違う風土も文化的なものも持ってらっしゃる中で、あちこちに飛び出してやっておられる実績は、これからのひと博の将来を考えると、非常に大きな財産ではないかなと思います。パワーポイントで紹介いたしましたが、東大博物館もいまから5、6年前から標本を置くところがなくなったため、廃校になった小学校を博物館に使わせて頂くことができないかということで、教室をミュージアムに変えていこうという試みを行いました。また複合教育プログラムという、子どもたちの年齢に応じた教育活動も試みました、これからお話が出るとおもいますが、先ほど中瀬副館長からご紹介頂きました「演示」は、今まで受け身だった観客、とくに子どもたちが主役になれるような活動として、大変素晴らしい将来計画だと思います。ぜひ、頑張ってくださいと思います。

岩槻：どうもありがとうございます。標本に関しましては、さきほど近藤館長のお話の中にも発信と言うキーワードがありましたけれども、これまで自然史系の研究者がいかにか標本が大切なものであるかということ世の中に発信していなかった、発信力が弱かったというのは十分反省しないといけないことで、その意味では20年を機に、ひとくだけでも少し手入れをして頂きました「魅せる収蔵庫」、収蔵庫を皆さんに見て頂くというシステムと、それから「ゆめはく」号というキャラバン車と、それはどちらも発信するための非常に重要なツールになるものだと思って、それをいかに我々が上手に使って、発信力を高めていけるかというのがこれから問われていることだと、ひとくの館員もそういう意識で対応して行きたいと思っています。「演示」というようなことを言ってもそれを展開する場所がなかったわけですが、小さくともそういう舞台ができて、場所ができたにも関わらず演示が展開できなかったというのでは能力がなかったということになりますので、それは全員で取り組んでいきたいと思っていますし、また、もっといろいろああしたら、こうしたらとご示唆を頂けたらと思います。特に林先生は先ほども紹介させて頂きましたビジョンの委員会に入っているんで、そういう場でもまた議論をさせて頂ければと思います。ということで、自己紹介替わりの第一ラウンドを終わらせて頂いたんですけども、今日のテーマに「地域貢献」というキーワードを入れていますが、この地域と言う言葉は、例えば兵庫県立博物館なら兵庫県という地域をすぐ認識してしまいそうなんですけれども、そういう言葉づかいというよりはむしろ、環境問題への対応と言いますとアクト・ローカリー／シンク・グローバリーと、我々が活動するのはローカル、自分のいる場所でしか活動はできないわけで、しかし常にグローバルにものを考えます。確かに東京大学や科博と言えば、日本のということになって、地域じゃないという言い方をされることがあります

けれども、実はそうではなくて、グローバルに見たら日本は一つの地域だという言い方もできる。そういう意味で地域と言う言葉を広義に使って頂いて、地域貢献と言うことからこれからの博物館のあり方がこういうことだというご示唆などありましたら、ご発言頂けたらと思います。今度はどなたからでも。では、近藤館長からお願いいたします。

近藤：「地域貢献」は博物館にとって大変重要な役割の一つだろうと思っておりますが、一つの博物館だけでは人的・物的、あるいは知的な資源に限界があるわけですから、当然他の博物館なり、学校、企業、NPO 団体と言ったいろんな団体、あるいは地域住民との連携が重要だろうと、こう思っています。そういう意味で特に私は大学との連携が重要であると考えています。大学には本当にいろいろな人材または資源が豊富にありますから、そういう意味でひとはくは開館以来、県立大学と兼務体制を引いていらっしゃいますが、これは大学の教官の能力を博物館の中に取り込むと言うので、大変特徴的な仕組みであると思いますし、それが成果を上げてきたと思います。実は1週間ほど前に日本経済新聞だったと思いますけれども、文化欄に兵庫県の記事が載っておりました。これは国立の神戸大学の取り組みだったかと思っておりますけれども、県内のたしか三田市も入っていたと思っておりますが、30ほどの地方公共団体、地域住民と連携して、地域おこし、あるいは地域住民の生涯学習支援ということで、いろんな事業を展開されているとのことでした。ただ経済的な制約もあって、本当に継続してできるのかということが最後の方に課題として書いてありました。大学にはそう言った能力があるわけですから、博物館もこれを活用しない手はないのではないだろうか、そういう意味で、博物館は国公私を問わず、今後はもっといろいろな大学と連携を深めていくことが大事だと思います。それからよく博学連携ということがいわれているんですけども、実際我が国では、小中高等学校での博物館の利用実態と言うのは極めて少ないというのが実情であります。これは学校の先生方の博物館への理解度がまだ低いということもあろうかと思っておりますけれども、博物館の側にも課題があって、いま小中高等学校の先生方はみな忙しいわけです。いじめ対策もしないといけないし、学力も落とさないといけないということで忙しいわけですから、学校で使い勝手のいいプログラムにしていけないとやっぱり使って頂けない。そういう意味では学習指導要領に対応した学習支援プログラムを開発して支援して行くということが大事なんだろうと思っております。これはひとはくでもずいぶんいろんなことをやられていると聞いていますし、実は私ども科博でも全国の博物館と協力してプログラムの開発を進めています。ここでも全国のいろんな博物館との「連携」というのがキーワードになるんだらうと思っておりますけれども、そういったかたちで学習支援プログラムを開発し、普及を図っていく、そういう工夫や努力が必要なんだろうと思っております。そんなプログラムも科博でも開発しておりますので、ぜひ、今日は全国からも来ていらっしゃるので、活用頂けたらと思っております。それともう一つは生涯学習と言う観点からいけば、幼時から高齢者まで幅広い世代に応じたプログラムの開発・普及を図っていくということも大事かと思っております。要すればヨコとタテのつな

がりを持った生涯学習プログラムを体系化して進めていくこと、これはひとはくの言う生涯学習院の実現にも寄与するのではないかと考えておりますけれども、そういうような活動を通じて、地域への貢献もより深まっていくものと考えています。

岩槻：博学協働は、大学の施設だからという訳ではなくて、ひとはくの場合は逆に教育委員会の傘の下にありますので、小中高校との連携はそういう意味からつくりやすい。実際それで博学協働を具体的にいろいろ進めさせて頂いていますし、今日も魅せる収蔵庫のそばでキノコの説明をしてくれた御影高校の人たちは長い期間をかけての連携をしっかり構築している高校です。科博と一緒に事業も今年の8月には20周年の一連の事業の一つとしてやらせて頂きました。そういう意味では博学協働も展開はできていますし、もちろん大学の研究所であるということも意味があると思いますが、博物館の持っている学校にはない機能というやはり資料を持っていて、このごろは学校はどうしても座学中心で体験学習に乏しいと言われていますが、そこを担えるという意味では、博物館が相当に力を発揮できますので、博学協働はますます積極的に展開して行く必要がある部分ではないかと思っています。

安部：りっぱな冊子も見せて頂いたんですが、20年の蓄積と言うのは地域連携と言う意味でも大変なものだと、その密度の濃さと言うのは大変なものだと思いました。僕のところはまだ、いま12年目ですが、10周年は水族館の持続可能性というテーマで国際シンポジウムをやったんですが、まさにその持続可能性が脅かされたということで、やはりこう言う公共の施設を長く活力のあるものにしていくというのは、言ってみれば施設が年を取るというのは人も年を取るし、皆が理念を省みて時々初期化を試みないと空間が狭くなるということがあるんだろうと思っています。全部ちゃらにはできないですけども常に初期化を試みながらやらなきゃいけない。僕のところは生きたもので、しかも水産物ですから、漁業振興とか、おいしい水族館というコピーもあるんですけども、おいしい博物館もあってもいいんじゃないかと思っています。とにかくあまり博物館や水族館、動物園に関心を持たない層はどういう層かということをいつも考える必要があります。僕は東京都葛西臨海水族園の計画に携わった時に谷口吉生さんという建築家に聞いたんです。どういう人たちが水族館に背中を向けてるのかなってお聞きしたら、それはファッション業界だろうって返事でした。水族館なら美術館仕様になってますんで、ファッションショーもできるかなと思ったりしてるんですが。そんなことをいつも考えながら運営してるんですけども、まあ災害で大変勉強したのは先ほど申し上げた通りでして、建物の中の空間を前提にすると、限界があるんで、やはりこのひとはくのように周辺に広い空間があれば、これはそっちの方で幾らでも展開できるかなと思っています。僕の水族館も建物から外へ出て、電気で動く部分は最小限にして、緑の空間を増やして、そこでの水辺の言ってみれば里山をつくる事かなと思ったりしています。

岩槻：ここも、この周辺の緑豊かな部分は博物館の敷地ではなくて、三田市の土地ですけども、博物館のいろんな活動に十分活用させて頂いていて非常にありがたいと感謝しています。先ほどの副館長の話にもありました有馬富士公園のようなすぐ近い公園と協働の仕事もできておりますし、私自身も昔、植物園のことをやっておりましたので、生き物を扱う方が断然有利だと思います。ただ植物を扱ってますと、旭山動物園のように動物は人寄せパンダに使うことができますが、植物園に来た人がなぜ植物園には猿はいないんですかと、動物を要求されることがあって、当惑したことがありました。林先生いかがでしょうか。

林：先ほど岩槻先生がおっしゃっていた地域貢献について、お話しいたします。兵庫県が全国的な組織にされた「ごはんを食べよう国民運動推進協議会」は、阪神・淡路大震災の際に炊き出しで食べたおにぎりがおいしかったという経験から生まれた組織ですが、日本の農村を元気にするためには、お米の消費量を増やそうという運動をしております。しかし、国民の多くは食料自給率を上げるのは総論賛成なんですけれども、それじゃあお米をもっと食べるかという、そういう風にならないですね。毎年消費量が減ってきた結果、50年前とくらべて半減しています。昨年には、パンを購入する金額がお米を購入する金額を上回りました。そこで、例えば日本酒で乾杯という運動が起きるわけですね。日本酒をもっと飲んで頂けると、山田錦など、これは兵庫県でもたくさんつくっておられますけれども、お米の消費量を増やすうえで大変ありがたいことです。しかしアルコール濃度が16%程度の日本酒は乾杯には不向きなお酒ですので、ワインに対してシャンパンが存在するように、もう少し軽い炭酸系の日本酒があると便利です。1500ある蔵元の中には、そうした10%程度の飲みやすい日本酒、乾杯用の日本酒をつくっているところもありますが、残念ながら古い酒造メーカーの中には、10%の日本酒なんて日本酒とは言えないとか、いろいろ理屈をこねて新しい流れに対応しようとしなくていいところが少なくありません。その結果、韓国のマッコリが日本を席卷するような事態を招いてしまいます。総論賛成・各論反対にならないように新しい考え方を入れていく、それは博物館の地域貢献についても言えることだと思います。博物館は、ある一定の規模になると、このひと博もまさにそうなっているように、知的拠点になり得るわけですね。知的拠点が地域で頑張る人たち、地域のリーダーを育てるといってそういう活動を現在進めておられる。知的拠点としての活動を高めるには、今日配って頂いた「ひょうごのふるさと見守る仲間たち」には、ものすごい数の団体・組織が紹介されていますね。日本でこれだけの数がある地域なんて他にはないと思います。この方たちと一緒に、地域の生き物をまもる活動をとおして、地域の活性化のためにどうすればよいのか。それには多様なやり方があるんじゃないかと思いますが、ぜひその知的拠点として、ひと博がこれからの10年間、20年間活動して頂けると思います。

岩槻：ちょっと話題がずれますけれども、震災の直後にふくしまのアクアマリンの方からお話を伺ったことがあります。ああいう大災害にあわれても、その後のリスク処理と言うか事後処理を大変上手にやられましたですね。我々も常にそういうことは気になるんですけれども、そういう活動は、日常的にリスクに対してどう対応するかということは、アクアマリンの場合はお考えになっていたんですか？それとも日頃の活動がああいうことが起こったときにもすぐに適切に対応できたということなののでしょうか？

安部：消防訓練があるように、お客様の安全と言うのは訓練するよりほかないですね。それが職員の身についていち早く避難させたんですが、逆にあとで公共施設は安全にできているからお客を出す方が危なかったんじゃないかという言い方もされました。津波と言うのは何回も来るので、最初の津波が来る前にお客様を避難させたんですが、その後、夜中まで何回も津波って来るんですね。ですから、下手に外へ出てうろちょろすると被害にあう可能性があるんですね。津浪に対する安全と言えば防災の対処としてはほとんど何もしていません。確かに水族館のように一日平均 3,000 人集まるところは、またあつてはいけないとは思っていますけれども、やはり防潮堤を築かないといけないと思っています。

岩槻：人に対してもそうですけれども、飼育してらっしゃる動物に対しても非常にすばやく手を打たれて被害は最低限で終わったという風に伺っていますが、それなんかもやっぱり日頃いろんなネットワークを持ってらっしゃる協力館との協力関係のせいなのでしょうね。

安部：水族館を維持するには、展示動物の収集のルートを持っていないといけないわけで、まあ、そのルートは逆にたどればストックもできるわけで、先ほど申し上げたように日本のたくさんの動物園や水族館のネットワークが機能したということですね。

岩槻：そろそろ結論に向けて話を収斂して行かないといけないんですけれども、私も先程、成人してから 21 年目のひとはくは、これからという言い方をしましたけれども、いままで既にいくつかご提言を頂いたんですけれども、こういうことはというようなご注文とか、ご提言とかが頂ければありがたいです。今度は逆に林先生の方からお願いできますでしょうか。

林：日本には 500 以上の博物館または博物館相当施設があります。博物館の中には国立科学博物館のような国立もありますが、多くは設置者が地方自治体や民間です。博物館の将来を考えていくとき、設置者が博物館の将来をどう考えておられるかは大変重要なことではないかと思えます。植物園、動物園、水族館は博物館相当施設として頑張っていますが、

国立の施設がなく弱い立場にあります。法律も博物館法に準拠しているだけです。日本における博物館などの多様化に対応するためには、できるかぎり早く法改正が必要ではないかと思います。また博物館などは、社会教育の装置として非常に重要であると認識されていますが、少子化はますます進行しますので、単に子どもの社会教育の場というだけでは、博物館などが不要だと考える地方自治体、あるいは民間の設置者が出てこられる恐れがあります。今後、博物館などの社会教育施設は本当に厳しい時代を迎えるのではないかと思います。ひと博に関して言えば、歴代設置者が素晴らしい方たちですので心配はないと思いますが、だから安心できるのかと言えばそうではなくてですね、恐らく日常的に情報発信をされて、県民やひろく国民にひと博の重要性を認識して頂くことが、設置者が持続的にひと博を支援されることに繋がるのではないかと思います。また、そうして頂くことによって、他の博物館や博物館相当施設の発展を支援することになると思いますので、ぜひ頑張ってくださいと思います。

岩槻：ありがとうございます。安部さんからもお願いします。

安部：私からは最初にも申し上げたように、生き残ったのは生きた化石ばかりだったっていうところと、人間も含めた進化っていうのを自然史博物館では共通テーマで共通メッセージを出せたらいいんじゃないかなと思っています。それから、このメモでローレンツアクリウムってありますが、どなたもペットボトルがあると思うんで池の泥と水草をポンと一つ入れて、窓際に置けばローレンツアクリウムができます。それが地球の自然のイメージだということを実験して頂きたいと思います。

岩槻：それでは近藤館長もお願いしたいと思います。

近藤：最後になりましたので、ひと言申し上げたいんですが、「人と自然の博物館」というネーミングなんですけれども、誰が名付けたか私は知りませんが、今となってみれば、大変先見の明があったと思います。特に東日本大震災は改めて、どういったかたちで人は自然と共存できるのか、自然とどう向き合い、どう付き合っていけばいいのかと言うことを我々日本人一人ひとりに投げかけている、問いかけているんじゃないかと思っています。そういう意味で言えば、人と自然の博物館という名称が、20年前に、しかも阪神・淡路大震災よりも前に付けられていますけれども、先人がこの名前に込めた願いと言うものをぜひ実現して頂きまして、兵庫県のみならず日本全国の人と自然との関わりを考える一大拠点となる事を期待致しております。ありがとうございました。

岩槻：どうもありがとうございます。先程のお話の中でも絆と言う、近頃はやりかもしれませんけれども、キーワードが出てきました。いま近藤館長がおっしゃったように、人と

自然の間柄ってというのはしばしば言われますように、西洋的な発想では、人对自然という現れ方になって、人と言う万物の霊長が自然をいかにうまく活用するかという、そういう視点で語られ、残念ながら日本でも最近そういう理解が圧倒的にドミナントになってきています。日本人のももとの発想は山川草木悉皆成仏という考え方であって、人と自然との共生が、このことはなかなか英語にならない、外国語にならないといつも申し上げるんですが、極端な言い方をすれば、日本人にしか分からない感性であって、人は自然のひとつの要素にすぎないということ、進化論がそれを明らかにするより以前から私たちの先祖はそういう生き方をしてきました。それが残念ながら西洋文明に汚染されて、失われつつある。今、本当は我々日本人がそういう考え方を世界に向けて発信して、そういう見方で、しばしば言われるサステナビリティ、持続性もはじめて実現できるということも主張すべきだと思うのですが、これは学校教育で教えられるようなことではないように思います。やはりそれは体験学習を通じて、自然と接するという事を通じて、はじめて学べることであって、兵庫県の場合には小学校の時に森林教室だとか、体験学習の機会が設けられてはいますけれども、やっぱり日常的な活動から言いますと、博物館のようなところがそれに対して貢献する、博物館とか水族館、動物園とか植物園もですけどもそういうところが貢献するのが一番可能性もあり有効であるという風に思います。ひとはくの全体の流れの中にはやっぱりそういう考え方がある、「演示」をやりたいとか、「生涯学習院」とかいう発想が、ちょっとすぐに分からない言葉が出てきてしまったりしますが、そういう意味で20年間の経験が大人になってからの活動に上手に活かされるかどうか、自分たち自身もまだ不安がりながらアクト・ローカリーをこれから発信して行くことだと思います。先生方のところもそれぞれ独自の活動をやっている。そういう活動を通じて私どもの活動についてこれからも厳しいご批判を賜りまして、それで日本の博物館等施設全体が日本人の科学リテラシーを高めるのに貢献できるようになればと思っています。今日のお話を総括させていただきますと、そういう、日本的なという言葉は出てきませんでしたけれども、我々の持っている感性の良さを博物館活動を通じていかに実現して行くかということだったと思います。時間は短かったですけれども、非常に有益なお話を頂きまして、どうもありがとうございました。どうぞ、これからもよろしく願います。